



| | |
|--------------|--|
| Title | 津田左右吉の虚像と実像—日本における「歴史科学」の想像力をめぐって |
| Author(s) | 一瀬, 陽子 |
| Citation | 大阪大学, 2007, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/47172 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|------------|--|
| 氏名 | 一瀬 陽子 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 第 21291 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 19 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻 |
| 学位論文名 | 津田左右吉の虚像と実像 —日本における「歴史科学」の想像力をめぐって— |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 木村 健治 (副査) 教授 北村 卓 助教授 三藤 博 |

論文内容の要旨

本論の目的は、従来の研究においてナショナリズムと関連した戦後歴史学を徹底的に批判することである。近年、戦後歴史学は、その安易な科学主義や、大学としての制度ゆえに、自己の「戦後」性、あるいは国民国家に対する疑いの欠如を問題視されているⁱⁱ。戦後歴史学がいかに津田を受け入れたかという学説受容の問題をとおして、戦後歴史学を批判する試みである。正確にいうなら、筆者が戦後歴史学を批判するのではなく、津田自身が戦後歴史学を批判するのである。

本論において筆者が行うのは、「読者共同体」批判である。津田の戦後著作から津田の戦後歴史学批判を引用しつつ、戦後著作を「時事評論」としてしか評価しなかった戦後歴史学の史家たちが、津田説の「読者」として支配的様相を示していたということをとらえてゆく。ロラン・バルトのいったこととちょうど反対の立場になる。いわば「作者」の支配ⁱⁱⁱ を越えようとしている。津田は、1959 年の「わたくしの記紀の研究の主旨」において、「いはゆる記紀に関する拙著は、今日でもなほ多くの讀者によって著作の主旨を誤解せられてゐるやうに思はれるふしがある」という^{iv}。津田は「多くの讀者」によって「誤解」されてきたことを嘆かわしく思い、そのまま世を去った。これは、讀者の権力そのものではないのか。バルトは文学研究のことについてだけ述べていたが、ヘイドン・ホワイトの著作とバルトの著作をあわせて読んだときに、本論における問題意識に転化する。ホワイトにならい、史家のつむぎだす歴史叙述や歴史像を物語としてとらえ、史家を文学の作者と同じようにとらえた^v とき、讀者としての史家たちも、同じように自由に津田の著作を「読み」、自由に解釈してきたのではなかったかという問い合わせが生まれるのである。本論で問うるのはバルトが「復権」させた「読みの主体」の権力であり、文学の讀者だけでなく、物語としての歴史叙述を読む史家という讀者にも応用する^{vi}。よって、なるだけ津田の意志にそった形で津田のいわんとしたことを解釈し、それによって津田自身を大きく飛び越えて形成されるにいたった「虚像」の存在を明らかにし、「実像」をさぐりながら、「虚像」をつくりだした戦後歴史学の問題点と、津田の問題点を浮き上がらせる。

課題の第一は、津田説を受容する過程でつくられた「津田像」をめぐるイメージの奪用、利用のダイナミクスである。具体的には、日本においてマルクス主義の立場にたった史家たちが、どのように津田の著作を読みえたかということである。タイトルの一部となっている津田の「虚像」とは、そのような事情によって形成された津田のイメージ、

あるいは津田説のイメージである。換言すれば、津田説のうち光があてられた部分のことである。社会科学としての戦後歴史学^{vii}に大きな影響を与えた。これから見てゆくとおり、戦後にはその社会科学としての戦後歴史学と対立した。津田と戦後歴史学の議論は、それ自体が従来のイメージとの関連でとらえられる必要がある。戦後歴史学の歴史像・国家像は、津田の業績を受容し吸収した上で形成されたものではなかったか。戦後歴史学は、津田から得たものによって「日本文化」なり日本における歴史教育を想像=創造したのではなかったか^{viii}。津田の学説、もしくは「虚像」が、そのような文化形成や教育のあり方に多かれ少なかれ影響してきたのである。では、かれの学説は後学である戦後歴史学にどのように影響したのか。そして、どのように「虚像」が作られ、その「虚像」は何を創造したのか。

第二の課題は、今、津田の学説をどのように再評価できるかを考えることである。すなわち津田の「実像」をいま、どのように評価できるかということである。このように広い関心によって次々と興味深い論考をあらわした津田の論のエッセンスは、昭和の史学やその関連分野に受け継がれたのであるが、今となっては津田の業績は過去の達成にすぎないのではない。戦後著作を中心として津田の本を読み返すと、おどろくべきことに、昭和の文化表象や教育のあり方などの問題点や反省点があらわになるのである。本論では数々の文化表象や教育のあり方について津田の提言を聞くつもりである。そこで津田の主張は、現在においても妥当なものであるかどうか。また、戦後の津田の主張が妥当なものであるとすれば、それは津田の戦後著作が評価されることが少なかったことと関連しているのではないか。

このような課題から、つぎのようなことを立証した。

第一の課題からは、さまざまな意味における、津田説への「解釈共同体」的な解釈を指摘した。津田の研究は、戦前には「神代史上代史抹殺論」、「東洋抹殺論」といわれ、戦後には「日本神話」研究といわれ、現在もそのようなイメージが語られつづけている。津田へのレッテルはそのほか、ナショナリスト、「象徴天皇制」を準備した人物、さまざまあるが、戦前と戦後に通底する「解釈共同体」の存在を指摘した。戦後の「日本神話」研究としての津田説という津田評にあらわれている価値観が、ほぼ同じだということである。それは是非判断は別として、少なくとも古事記上巻と日本書紀卷1-2、または論者によっては古事記中巻と日本書紀卷3-10までをも虚構もしくは架空の歴史として見ることであった。また、「主体性」論争とのかかわりで、そとに目を向けようとしなかったとされる戦後歴史学は、おそらく「東洋抹殺論」を担った結果、津田を「一国史」的表象、もしくは「日本史」の研究者として解釈した。津田は「否定の史学」としてのみ解釈され、十分に意図がくまれず、たとえば津田が議論の前提としていた朝鮮史研究がほとんど無視される形となった。それは戦後歴史学による、否定という名の日本礼賛であると考えられる。「歴史科学」すなわちマルクス主義史学は、津田がいささか辛らつに言っていたとおり、「自分たちが何か特別の権威でももってゐるかの如き態度で、従つて断定的な口調で、その説を主張してゐるやうに見えます。これはちょうど、右翼の人たちが日本の歴史についてやかましくいつたのと同じしかたであつて、たゞその思想の方向が反対になってゐるだけの違ひがあるのみであつたのであった。

それから、第二の課題、すなわち津田の「実像」とは、津田が階級闘争史観をとらなかったということに関連している。津田は戦前から階級闘争史観を批判していた。戦後歴史学は、さまざまな形で、みずからの思う古代史像を「津田説」として解釈したが、階級闘争史観は、戦後歴史学がつながってしまった歴史像もしくは歴史教育の最大の問題である。中国の「奴婢」はなんの論証手続きも経ぬまま、日本においても奴隸となり、罪人を意味する「雜戸」も、中国におけるのと同じく、おとしめられたものと解釈された。それは一方で明治の史家の問題でもあったが、「歴史科学」の祖早川二郎の学説もそうであった。ことにマルクス『資本論』から「東洋的專制君主」の下にいた「東洋的奴隸制」が見出された結果であった。戦後歴史学では、早川二郎の学説がなんども再評価される機会があったが、早川学説には、「東洋的奴隸制」が現代の被差別部落遺制とむすびつけられる欠点があった。「天皇制」という名のもとに古代「天皇制」を階級闘争史観でさばくことは、西郷信綱によれば社会関係がちがっていたのにもかかわらず、現代の「天皇制」は古代「天皇制」の反映であり批判的にとらえられた。1948年の石母田のように、古代「天皇制」が英雄時代を経験したことを強調するのではなく、戦前の早川二郎のように「貢納制」段階を経るものであるという説が再評価された所以であった。英雄時代論争の挫折以後、古代の「天皇制」の「東洋的」な専制支配を強大なもの

として解釈する傾向があったと考えられる。対して津田は古代における隸属性を最初から前提する立場になかった。それは、階級闘争史觀から離れることができたためであった。

ⁱ 前掲、二宮「戦後歴史学と社会史」（前掲、歴研編『戦後歴史学再考－「国民史」を超えて』、2000）p. 127.

ⁱⁱ 西川長夫「戦後歴史学と国民国家論」（前掲、歴研編『戦後歴史学再考－「国民史」を超えて』、2000）p. 79.

ⁱⁱⁱ Barthes, R. "La mort de l'auteur," *Manteia*, V, fin 1968 (花輪光訳「作者の死」; 『物語の構造分析』みすず書房、1979, p. 81.)

^{iv} 津田左右吉「わたくしの記紀の研究の主旨」（歴史教育研究会編、『歴史教育』7卷5号、1959）p. 1.

^v ハイドン・ホワイトは史家の仕事について以下のように言う。

It is sometimes said that the aim of the historian is to explain the past by “finding,” “identifying,” or “uncovering” the “stories” that lie buried in chronicles ; and that the difference between “history” and “fiction” resides in the fact that the historian “finds” his stories, whereas the fiction writer “invents” his. This conception of the historian’s task, however obscures the extent to which “invention” also plays a part in the historian’s operation. (White, H, *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*; The Johns Hopkins University Press, 1973, p. 6.)

以上は史家が物語を発見するのではなく、創造しているのだということを述べた一節であるが、“invention”が程度の差はあれ史家の仕事であるというホワイトの指摘は重要である。

^{vi} 二宮宏之『歴史学再考：生活世界から権力秩序へ』（日本エディターズスクール出版部、1994）pp. 278-280. 二宮は、ロジェ・シャルチエがその書物の文化史（Chartier, R. *L'ordre des livres-lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIV^e et XVIII^e siècle*, Aix-en-Provence, Alinea, 1992. [長谷川輝夫訳『書物の秩序』（文化科学高等研究院出版局、1993）]）において、「作者の死」すなわちテクスト自立の考え方を批判して、改めて作者への回帰という方向をさぐりはじめていることにふれ、「歴史叙述の書き手としての歴史家とテクストとしての歴史叙述の関係という問題が、当然浮上することになりますね。シャルチエは、その問題を、書物の文化史との関連ではなく、ハイドン・ホワイトやドミニク・ラカプラとの議論のなかで論じていくことになるでしょう」と述べている。

^{vii} 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」（歴研編『戦後歴史学再考－国民史を超えて』、青木書店、2000）p. 124. 戦後歴史学とは「戦前の日本資本主義論争の遺産を受け継いで戦後一斉に開花した社会科学的歴史学」と定義される。

^{viii} 本論のタイトルである“「歴史科学」の想像力”というのは、しばしば指摘されているように、ナショナリズムと切っても切れない関係にあった「歴史科学」としての戦後歴史学(Anderson, B. *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*, 1991. [白石さや・白石隆訳『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997])がどのように日本という国家を想像していたかを本論で論じることを意味する。またこのような想像力が何を生み出したかということを論じようとする意図をも込んでいる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、中国古代の宗教政治思想研究、日本古代史の批判的研究、あるいは、「日本神話研究」で、名声を得ていた津田左右吉(1873-1961)という知識人の学説を再評価し、その虚像と実像を明らかにしようとするものである。

本論文は、序章で津田左右吉の著作を概観し、本論の問題意識および方法を述べた後、第1章では、津田の戦後の論文「建国の事情と万世一系の思想」（『世界』1946年4月号）がセンセイションを巻き起こしたのは、戦前の津田の「虚像」にその原因があったことを立証している。第2章では、津田の「日本神話」研究者という「虚像」について論じ、「実像」を明らかにしている。そして、第3章では、第2章の考察を踏まえて、記紀解釈史における津田の位置を、神武天皇以降を記述する古事記中巻・日本書紀3-10を中心に検討し、第4章では、津田の日本文化論と日本語論を論じ、最後の終章で全体のまとめを行っている。

本研究は津田左右吉の膨大な量の学問的著作（大正時代から戦後昭和時代に至るまで）を読みつつ、一方で、津田批判を丹念に読みこみ、戦前においても戦後においてもつくられた津田研究の「虚像」—戦前には「神代史上代史抹殺論」、「東洋抹殺論」、戦後には「日本神話研究」と言わされたーを、逐一検討し、津田左右吉の再評価をおこなったものである。津田の研究領野は相當に広く、慎重に資料を扱いつつ、それを読み込んで、その上、その批判ー例え

ば、家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（1972年）などの戦後史学からの一を検討し、津田の影響力を考察した労作であり、津田左右吉の「実像」の全体像がかなり鮮明に浮かび上がった論文である。構成や叙述の仕方で工夫があればと思わせるところもなくはないが、それは、本論文の価値を損なうものでは全くない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認める。